

第二章・イナヤット・キラにて

「二千ポンドの教育が

一〇ルピーのジェザイル（*アフガンの手作りマスケット銃）に倒れる。

.....

構ってくる奴を強く殴れ。撃てる奴をまっすぐ撃て。

オツズは安い男についている。」

ラッドヤード・キップリング

一七日、夜明けの三〇分前に騎兵隊は馬に乗り、荒れた地面を通るのに十分明るくなると、戦隊は直ちに行方不明の軍隊を探し始めた。二時ごろから私たちは銃声を聞かなくなっていた。そこで私たちは彼らが敵を打ち負かしたと判断していた。もちろん、その沈黙にはもう一つの理由があるかもしれない。ピロット村の近くで馬を止めたとき、壁や家の辺りで動く人影が見えた。先進縦列は慎重に進んだ。突如、彼らは短縮駆歩で壁に接近し、私たちは少なくとも数人が生きていることを知った。コール大尉は自分の戦隊を振り向いて手を挙げた。スワール隊は衝動を共有してあぶみの上に立ち上がり、歓呼し始めた。しかし応答はなかった。これも不思議ではなかった。村は修羅場であった。外壁の一つの角に戦闘の生存者がいた。三つめの側面は浅い塹壕で保護されていた。周りには男たちとラバの死体が横たわっていた。五、六人の現地兵士の遺体が急いで掘られた墓に埋葬されていた。彼らはマホメダンだったので、彼らの墓は部族民によって尊重されると考えられていた。「これらの遺体はその後掘り起こされ、原住民によって損壊された。これは軍のあらゆる信条の兵士を激怒させ憤慨させる胸の悪くなる行為であった。私がこの不快な問題に読者の注意を向けさせるのは、単に山の野蛮人たちの心の退廃について先の章で述べたことの正当性を示すためである。」一八人の負傷者が屋根のない小屋に並んで横たわっていた。痛みと不安に引きつった彼らの顔は早朝の淡い光の中ですっかり青ざめていた。一人は左手を撃たれ、もう一人は両足を撃たれた二人の将校がいた。彼らは間に合わせの止血帯が取り除かれ、苦痛がいくらか緩和される瞬間を辛抱強く待っていた。頭からの出血に染まったカーキ色のコートの准将は、ヘルメットに弾丸の穴のある唯一の参謀将校と話していた。最も熱心にリアリズムを愛する人は満足したであろう。食べ物、ドーリー、および医師がすぐに到着した。負傷者は野戦病院に運ばれ治療を受けた。無傷の者は急いでキャンプに戻り、朝食をとって行水をした。三〇分後にその縁起の悪い場所にいたのは傷ついたラバを撃つ数人のスワールと、期待を込めて成り行きを見ていたハゲタカだけであった。

私たちは徐々にその夜の話を聞いた。約三〇人の工兵と第三五シーク隊の半個大隊からなる砲兵隊がキャンプに戻りつつあった。ガイド隊の銃声が聞こえていたので、支援のためには彼らは一晩中停止して外に留まること、という命令が七時頃出された。准将は何より

もその安全を心配していたのである。この命令が砲兵隊に届いたので彼らは工兵隊を護衛として戻り、ヌラーを再び横断してピロットの村の外でシークの二個中隊を伴った將軍に出会った。第三五隊の半個大隊はどうやら命令を受け取らなかったらしくそのまま行軍を続けた。王立砲兵隊のウィンター中尉は彼らを探すために送り返された。彼はそれを見つけれなかったが、ウォーリッジ少佐指揮下の元気な四個中隊に出会った。ガイド隊の二個中隊と第三五隊の二個中隊である。彼らは將軍の増援要求に応じてキャンプから送られたのであった。ウィンター中尉は彼らを砲の護衛として連れ帰った。村に到着すると准將はすぐに彼らをガイド隊の支援に送った。彼は自分のシーク隊の二個中隊を計算していた。しかしウォーリッジが退去し、すでに夜の闇に消えたとき、この二個中隊も消えたことが判明した。彼らは暗闇の中で接触を失っており、將軍が停止していることに気づかずキャンプに向かってしまったのである。こうして砲は三〇人の工兵以外の護衛なしに残されることになった。

そのときバフ隊の一二人の兵士のパーティーが到着した、そして、彼らが砲の元に導かれた事情は記録しておく価値がある。バフ隊は村を通って撤退中に、敵の前進を阻止するためにしばらくの間マホメダンの墓地を保持していた。そこへジェフリーズ將軍の当番將校バイロン中尉が馬で乗りつけ、後方中隊を指揮していたムーディー少佐に告げた。道の一〇〇ヤードほど先に負傷した將校が護衛もなしにドーリーに横たわっている。数人の人手が欲しい。ムーディーは命令を発し、伍長以下十数人の兵士たちがそのドーリーを探し始めた。彼らはそれを見つけられなかったが、捜索中に村の外で將軍と砲と兵を見つけた。この連発ライフルを持った一連隊の名譽を完全に守った一二人の勇敢な兵士の存在は、まさに局面を変えた。イギリス軍の運が彼らを村に導かなかつたとしたら、砲が奪われ、將軍が殺されていたことは疑いがなく、もちろんそこにいた誰も疑わなかつた。幸運の女神は、特に戦争においては、小さな支点にその強力な梃子を使用するものである。

次に將軍は砲と工兵隊に村に入るように命じた。しかし燃えるプーサがいっばいで不可能であった。そこで兵士らは村の外で自らの塹壕を掘り始めた。村はすぐに敵でいっばいになった。彼らは砲と兵が占めるスペースを二方向から見渡す家と壁から、約三〇ヤードの距離で発砲し始めた。まるで敵がその壁を保持しているラケットコートにいるかのようになり、部隊の全体が晒されていた。砲や負傷者を捨てていくことはできなかつたので、彼らは動くことができなかつた。幸いにも、この地点の多くの部族民はライフルで武装していなかつた。彼らは石と燃えるプーサを小さな守備隊の真ん中に投げた。彼らはその光で良く狙いをつけた。誰もがあわせの遮蔽物の下に隠れた。あまり沢山はなかつたが、勇敢な現地兵士ガンナー・ニハラは差し迫った命の危険にありながら、燃えるプーサを繰り返し外套で消した。ワトソンとコルピンの両中尉は部下の工兵たちとバフ隊の一二人の兵士とともに村に押し入り、銃剣で敵を追い出そうとした。しかし小さなパーティーが掃討

するには村は大きすぎた。部族民は次々と場所を移動しながら繰り返し発砲した。彼らは数人の兵士を殺傷し、ワトソン中尉の手に銃弾を命中させた。しかし彼は奮闘を続け、再び撃たれて立ってられないほどの重傷を受けるまでやめなかった。部下は彼を村から運び出した。再度の試みは無益であろうと思われた。

読者の注意はこの将校の勇氣に向けられている。長い行軍と戦いの後、暗闇の中で、食物もなく、無勢で、重く痛い傷を負った後も揺るがず、怯まず戦い続ける人物に対してその勇氣において対等な者は少なく、優越する者は全くいない。おそらく耐えることは挑むことと同じくらい高い勇武の形である。両方の組み合わせは崇高である。「両将校はこの時の行動によってビクトリア十字章を受けた。」

九時の雨によって銃火は止んだ。部族民は火薬が濡れることを恐れたのである。しかし一〇時ごろ再開した。今や彼らは村の壁に大きな穴を開け、そこから約一二人の男が発砲して恐るべき効果を挙げた。他の者は壁に銃眼をつくり始めた。砲はこれらの獐猛な開拓者に二〇ヤードの距離で散弾を発射し、壁を粉々に砕き、多くを殺した。敵は弾丸、燃えるブーサ、石のシャワーで応えた。

そのように時間はのろのと過ぎた。將軍とバーチ大尉は、両方とも夜の早い時間に負傷した。傑出した勇敢さでふるまっていたウィンター中尉は一一・三〇頃に両足を撃たれた。彼はこれで四五日以内に二回重傷を負ったことになる。彼はさらに失血によって気絶するまで、砲を指揮し続けた。現地人砲手は自分も撃たれるまで彼を体で庇った。光景全体、切迫した、必死の戦い、ラバの死体、その後ろにうずくまる将校と兵士、ブーサの燃える山、ライフルの閃光、そして全てを覆う、あたり一面の夜の闇はドヌー（*アルフオンス、フランスの画家）の鉛筆に値する。

やがて、真夜中頃に助けが到着した。ウォーリッジの二個中隊はガイド隊を探しに行っていたが見つからなかった。彼らは再び戻ってきてピロットでの発砲を聞き、第一一ベンガル騎兵隊から伝令を送って將軍が援助を望んでいるかどうか尋ねた。この気骨ある少年は—ほんの若い新兵であったが—そこら中にいる敵とほとんど同様にわが方の兵士に撃たれる危険にさらされつつも、村までを冷静に騎行した。彼はすぐに救援の二個中隊を連れて来た。そして獲物を邪魔された敵は暗がりへ撤退した。砲兵隊とその防御者がそれ以上どれだけ長く持ちこたえられたであろうかは分からない。彼らは着実に人を失い、その数は非常に少なくなっていたので、いつ突撃を受けても不思議ではなかった。そういう話であった。

一七日には作戦はなかった。兵士たちは休み、死傷者は数えられ、負傷者は包帯を巻か

れ、自信が取り戻された。前日に殺害された英軍将校と兵の葬儀は正午に行われた。参加できる者は全員参加した／しかし軍葬の華美はすべて省略され、身体を覆うユニオンジャックはなく、墓の上での斉射はなかった。負傷者の邪魔をしないためである。その全てが間違いないようであったと言える／自国のための戦いの中で命を落とした人々の遺体がキヤンプのどこかに―正確な場所が今は故意に忘れられているが―静かに埋葬された。記念碑はなかった。荒らされないことを保証するのは、知られないことだけである。それにもかかわらず葬儀は印象的であった。戦争のゲームは一部の人々に戦利品、名誉、昇進、または経験を／他の人々には義務を果たす意識を／そして他の人々―おそらく傍観者―にはプレイの楽しみと人々と事物についての知識をもたらす。しかし、ここにはすべてを失つて兵士の墓だけを得るといふ―悪い数字を引いた人々がいた。お決まりのブランケット、民族の誇り、帝国の威厳に包まれたこれらの形のない形を見ると戦争の栄光などほんやりした実体のない夢の織物に過ぎないと思えてくる／そして私はバーク（*エドモンド）に思い至らない訳にはいかなかった。「私たちの存在はなんと影のようなものであろうか、そして私たちが追い求めるものはなんと影のようなものであろうか」

交戦人数に比して実際の死傷者数は長年にわたるインドでの英国軍のどの作戦よりも多かった。一〇〇〇人を超えない軍隊において、九人のイギリス人将校、四人現地将校、一三六人の兵士が死亡または負傷したのである。以下は全報告である…

イギリス軍将校

死亡― V. ヒューズ中尉、副官 第三五シーク隊
A. T. クロフォード中尉 王立砲兵隊
重傷― W. I. ライダー大尉 第三五シーク隊付属
O. G. ガニング中尉 第三五シーク隊
O. R. カツセルズ中尉 第三五シーク隊
T. C. ワトソン中尉 王立工兵隊
F. A. ウインター中尉 王立砲兵隊
軽傷― ジェフリーズ准将、第二旅団司令官 マラカンド野戦軍
バーチ大尉 王立砲兵隊

イギリス軍兵士

死亡 負傷
二 九

現地兵士

死亡 負傷

第一一ベンガル槍騎兵隊	〇	二
第八山岳砲兵隊	六	二一
ガイド歩兵隊	二	一〇
第三五シーク隊	二二	四五
第三八ドグラ隊	〇	二
工兵隊	四	一五

総犠牲者数、一四九ノ

四八頭の馬とラバ

一部では九月一六日の戦鬪は失敗であったと考えられている。私は事実在即してこの見解は正しいとは思わない。部隊は設定されたすべての任務を達成した。彼らはすべての抵抗にもかかわらずシャヒ・タンギの村を最も完全に燃やし、部族民に二〇〇人以上の損害を負わせた。敵は殺された者の死体から二二丁のライフルを奪ったことで意気を上げたが、軍隊の勇氣に感銘を受けていた。「もし」と彼らは言ったと報告されている。「彼らが分断されたとき、このように戦うのであれば私たちは何もできない。」私たちの損失は間違いなく重く、持っていたアドバンテージに釣り合っていないかった。それはマムンドの数と戦鬪力について軍全体で共有されていた無知によるものであった。この出来事のあとで多くが賢くなったが、これらの部族民は軍隊と同じように武装しており、または彼らが自ら証明したように勇敢で恐るべき敵であるということは誰も知らなかった。「敵を軽んじるな」というのは古い教訓であるが、好戦的で勇敢なすべての国々は毎年新たに学び直さなければならぬ。私たちの損失はまたライダー大尉の中隊の孤立によるものであり、救出するために暗闇に追いつかれるまで部隊全体が待たなければならなかったためである。危険を冒さずに戦争を行うことはできず、また後装銃で武装した敵に対して損失なしに作戦を行うことはできない、と言われている。弾丸から兵を完全に守る戦術はない。エラーに注意して困難を忘れ、危険の中で行われたことを安全な場所ですべての元を保障の元に戦時の行いについて意見を述べる呑気な批評家は、傷ついて、馬を撃たれ、最後の部隊とともに戦野に残り、部下の兵士の安否だけを気にかけている將軍の壯観が私たちの軍事史に値しない、とは言えないことを思い起こすべきである。

気さくで勇敢な戦友を失ったことによる意気消沈は、即時の戦鬪の見通しによって払拭された。ピンドン・ブラッド卿はそのときナワガイの陣地において危険にさらされていたが、増援の代わりに部族民に対する精力的な作戦の遂行を准將に命じた。そして一八日朝、ドモドロ村を攻撃するために部隊が動いた。第三八ドグラ隊が一六日に非常に強く占拠されていることに気づいた村である。再び敵は多勢であった。再び彼らはその効果的な戦術を採った／＼しかし今度はチャンスが与えられなかった。旅団全体が攻撃のために集中して行軍し、射程外の平坦地に隊形を作った。將軍とスタッフが前に騎行して偵察した。

村は丘の陥凹部にあり、そこから港の棧橋のように二つの長い支脈が突き出ていた。背後の山は唐突に五〇〇〇フィートの高さに聳えていた。支脈に囲まれた土地はトウモロコシと大麦の作物でいっぱいであった。砦と見張り塔が入り口を守っていた。八・三〇に前進命令が出た。敵は砦を守ろうとせず、即座に奪われて爆破された。マムンド渓谷での戦闘中において爆発は珍しい光景ではなかったが、それは見慣れないものであった。厚い赤褐色の塵の大きな雲が突然空中に飛び出し、あらゆる方向に膨張した。塔は半分に壊れて倒れた。一連のドンというくぐもった音が続いた。ホコリの雲が消え去ったとき、そこにはわずかな残骸しか残っていなかった。

敵は今や支脈から発砲してきた。両方の支脈が白い煙の小さな輪を頂くようになった。第三五シーク隊は前進して右の尾根、第三八ドグラ隊は左を片付けた。ガイド隊は村に移動し、メインの陥凹部を登った。バフ隊は予備であった。砲兵中隊は左側で戦闘を始め、反対側の丘の稜線を砲撃し始めた。彼らは器具によってその射程を測り、わずかに異なる射程で毎回二発の砲弾を続けざまに発射した。小さな砲が大きな砲声を上げて爆発した。それから山側のはるか上方で二つの煙の玉が上下に現れ、数秒後、破裂した砲弾の音がかすかに戻ってきた。通常、一つは狙った地点の少し手前に―もう一つは少し先に―落ちる。誤差を割り出して次の弾丸を的中させるのである。部族民が発砲してくるピークに破片と弾丸の粉塵が現れる。そして静かになり人氣がなくなる。―顧みられない悲劇の現場である。徐々に支脈から敵が取り除かれ、ガイド隊は村を通り抜けて山の斜面を登り、急な水路の大きな岩の間に落ち着いた。孤立した狙撃手は弾の雨を降らせ続けた。私が観察しているロックハート中尉の中隊はこの中の一人を一斉射撃で殺し、私たちは彼が小さな水たまりのそばに座って石にもたれて座っているのを見た。もともと醜い男であったが今では顎と顔の骨が弾丸でバラバラになったため、見るも恐ろしい姿になっていた。その唯一の衣服は腰で締めたぼろぼろの青い亜麻布の外套であった。彼はそこに座っていた―無知で、品がなく、むさ苦しいが勇敢で、好戦的な典型的な部族民である―その唯一の財産、彼の武器、それは同胞に持ち去られていた。私は社会的生命体としての彼の本質的な価値と、その週に殺された士官たちのそれを対比せざるを得なかった。この章の始めに出てきたキプリングの短詩が不思議な意味を持って思い起こされた。実際、私はそれがワテライ渓谷で引用されるのをよく耳にした。

今や工兵隊が村に入っており、粗末な家々を破壊するための準備に従事していた。その平らな屋根は土で覆われており、最初に穴を開けておかないと良く燃えないのである。これには時間がかかった。その間、部隊は獲得した陣地を保持し、敵との散漫な銃火の応酬を続けた。正午ごろそこに火がつけられ、濃い煙の雲が高い柱となって風のない空気中を昇っていった。そして軍の撤退が命令された。すぐに敵は反撃を始めた。しかし、ガイド隊の技量が上であった。各中隊の後退は他の中隊の銃火で援護され、遠く丘の下へと慎重に

素早く下って行った。敵に好機はなかった。一時までにはすべての中隊が破壊された土地から離れていた。バフ隊は後衛の務めを引き受け、すぐに燃えている村を再び占領した部族民との活発なちよつとした小競り合い―幸運にも人命の損失を伴わなかった―をして喜んでいた。これはおそらく三〇分続き、その間残りの旅団はキャンプに戻った。

この非常に成功した仕事の犠牲者は少なかった。これは頑強な忍耐力を備えたジェフリーズ准将がマムンド部族民の精神を打ち破った六つの事業の最初のものであった。

	死亡	負傷
第三五シーク隊……………	二	三
ガイド歩兵隊……………	〇	一
第三八ドグラ隊……………	〇	二
総犠牲者数	八	

敵の損失は相当なものであったが、信頼できる詳細は入手できなかった。

一九日、軍隊は休息し、キャンプを出たのは採餌部隊のみであった。二〇日、戦闘が再開された。谷の入り口の位置から丘のくぼみにあるすべての村を見ることができ、過去の場面だけでなく今後の戦闘をも弁じることができた。懲罰のために選ばれた特定の村の名前は決して口にされず、旅団がキャンプから数マイル行軍するまで目的は明らかにされなかった。したがって部族民は「栄光ある不確実性」(*イギリスで法律の議論において良く使われる)の状態を継続し、本当の多数を集めることができなかった。午前五時三〇分に旅団は出発し、騎兵隊に先導されて谷を行軍した―長い茶色の兵の流れであった。ほぼ中心に到着して軍隊はより間隔を詰めてコンパクトな隊形になった。そして突然先端がくると左に回転し、ザガイ村への行軍が始まった。すぐに山の斜面の高いところから煙の長い柱が空中に打ち上げられた。それは狼煙であった。他の丘がそれに答えた。この件は今や時間の問題となった。氏族が集まる前に村を占領し破壊することができれば戦闘はほとんどないであろう。しかし部隊が遅れたり深入りしたりした場合、その戦闘がどのような規模になるかは分からなかった。

ザガイ村はドモドロ村と似た立地条件にある。両側を長い支脈が谷に進み、その形の窪みの両側のテラスに家が建てられている。水路の近くに岩だらけの地面から豊かな美しさで伸びている見事なスズカケノキは緑のパッチとなって丘の斜面を目立たせている。背景の陰鬱な茶色とは対照的である。軍隊が細い隊形で接近するにつれて、絶え間ない太鼓の音がかすかに聞こえ、ラツパの音によって時々変化した。騎兵隊が偵察に出かけ、その場所は強固に守られていると報告した後、速歩で駆けて側面の監視に行った。敵は支脈の稜

線に旗を誇示していた。前進は続いた。ガイド隊は左側へ、第三八番ドグラ隊は中央、バフ隊は右側へ、そして第三五シーク隊は予備である。約九時に左側から銃撃が始まり、五分後に中央付近で砲が戦闘に入った。ガイド隊とバフ隊は左右の尾根を登った。敵は例によって後退し、「狙撃」に入った。そして第三八隊は前進して村を占領し、破壊するため工兵隊に引き渡した。彼らはこれをはなだ徹底的に行い、一時に家とブーサの山から濃い白い煙が上がった。それから軍隊は撤退するよう命じられた。「Facilis ascensus Avernii, sed revocare gradum, hic labor, hoc opus est. 地獄へ行くことは容易であるが戻るのは骨である。」私は通常アジア人に対しての前進は容易であり、全ての退却は危険であると説明できるので、この引用が私を困らせることはない。村が破壊されている間、敵は集まっていた。空を背景に暗い点からなる多数の線として一山の頂上に彼らの姿が認められた。他の者は隣接する左右の谷から来ようとしていた。右側の者たちは成功し、バフ隊はすぐに鋭く交戦した。左側の騎兵隊は再びその武器の力を示した。少なくとも六〇〇人を数える大勢の部族民が戦闘の現場に到達しようとしていた。そこにたどり着くには開けた地面を横切らなければならなかったが、それは槍騎兵隊の正面だったので彼らはそれをしなかった。この同じ部族民のうちの多くがマラカンドへの攻撃に参加しており、そしてインドの獐猛な騎兵によってカルの平野全体を追いかけ回されていた。彼らはその経験を繰り返すことを望まなかった。彼らがその友軍と彼らを隔てる空間を突破しようとするたび、コール大尉と配下のわずか五〇騎の戦隊は速歩で前進し、たちまち部族民は小走りに丘へ戻った。長い時間、彼らは遅れさせられ、スワールたちに向かってまもなく「お前たちをひき肉にする」とわめき立て、やってみろ、と返答されることに甘んじた。やがて彼らは丘を離れるなら騎兵隊から逃れられないことに気づき、長い迂回路を通って、村が破壊されて軍隊が去った約三〇分後に到着した。

それにもかかわらず、退却が進行していると見るやいなや、すべての戦線に沿って全面的攻撃が行われた。左翼では旗を掲げて前進し、剣を振るう約五〇〇人の軍勢がガイド隊を脅かした。彼らはこれを追い散らし、着実な長距離射撃で彼らを遠ざけ、多数を殺し、負傷させた。右翼ではバフ隊が別の支脈から見渡されることに悩まされた。私が同行したハスラー中尉の中隊は地面によってこの側面射撃から守られていた。しかし非常に多くの弾丸が頭上で唸りを上げており、それがどこから来るのかを見ようとして中尉は稜線を越えて向こう側へ歩いて行った。この半個中隊は活発に交戦していた。山の高い地点から正確な銃火が彼らに向けられていた。私たちはリー・メトフォード・ライフルでその地点を射程に収めようとした。それはほぼ一四〇〇ヤードと測定された。部族民はマティーニ・ヘンリーで武装しているだけだった。それにもかかわらず彼らは優れた腕前を発揮した。R・E・パワー中尉が腕を射抜かれ、ほぼ直後にケーン中尉が胸に重傷を負った。幸いな

ことに弾丸は最初に劍の柄に当たっており、もしそうでなければ彼は死んでいたであろう。二―三人の兵士もまた負傷した。マティーニ・ヘンリー・ライフルの射程と威力を知っている者であれば、その長射程において損失を与え得る手腕と射撃技量を高く評価するであろう。

撤退が進むにつれて部族民が近くへ寄ってきた。しかしバフ隊は恐るべき武器を非常に効果的に使用していた。私はその力が印象的に発揮されるのを目撃した。F・S・リープス中尉は配下の中隊の撤退を援護するために十数人の兵士を残し、この時大胆に前進していた敵に効果的な発砲を加えることを目指していた。三〇〇ヤード離れたところにヌラーがあり、その小隊を切り倒すため、これに沿って敵は走り始めた。しかし私たちの銃火はある地点で彼らの前進線を見渡していた。やがて一人の男がその開けた場所を走った。部隊は即座に発砲した。ライフルの大きな利点は固定した照準器を使用できるため、正確な距離を推測するのに困難がないことである。男は倒れた―白い点となって。他の四人が突進してきた。再び一斉射撃があった。四人全員が倒れて動かなくなった。この後、私たちはほとんど邪魔を受けずに順調に後退した。

軍隊が丘から離れるとすぐに、敵は岩と尾根を占領し、撤退する兵士に発砲した。バフ隊の退却線は、滑らかで開けた土地の上にあった。一〇分間の活発な発砲があった。一人の将校と七―八人の兵士が倒れた。地面は湿っていて深く、弾丸は柔らかい泥に突き刺さり、奇妙で物珍しい音を立てた。部族民が敢えて開けた場所へ出てこなかったため、部隊が射程外に出るとすぐに発砲は停止した。

最左翼にかなりの数の敵が現れた、そしてしばらくの間、彼らは丘を出て平野に入ろうとしているように見えた。しかし騎兵隊が速歩で前方に出ると、混乱して走って戻り、もと通り一緒に集まった。砲兵中隊はすぐにその真中に二発の榴散弾を爆発させ、大きな効果を挙げた。これで仕事は終わり、部隊はキャンプに戻った。死傷者は以下の通り……

イギリス軍将校

重傷―G・N・S・ケーン二等中尉

軽傷―L・I・B・ハルケ大尉

―R・E・パワー中尉

イギリス軍兵士

死亡 負傷

バフ隊

― 一〇

(負傷により死亡)

現地兵

負傷

第三八ドグラ隊…

総犠牲者数

一六

結局のところ小競り合いでしかなかったものについてこんなに長々と記述したことに対して、私は読者に謝罪しないことにする。辺境戦争の描写は本質的に細部の一つであり、細部の学びだけが本当の印象を与えることができるのである。

二二日と二三日にダグ村とタンギ村がそれぞれ攻略されて破壊されたが、抵抗はわずかであった。作戦に目立った新しい特徴もなかったため、これ以上の説明で読者を飽きさせないことにする。死傷者は以下のとおり…

イギリス軍将校

負傷—S・ムーディー少佐　バフ隊

現地兵

死亡

負傷

ガイド歩兵隊

一

二

第三八ドグラ隊

○

二

これらの作戦によりマムンド溪谷の部族は厳しく処罰された。彼らが一六日の戦闘に関して感じたであろう歓喜は完全に消え去った。旅団は思いのままに村を奪って焼き尽くす力を実演し、その行動を妨害しようとするすべての者に深刻な損失を与えた。部族民は今や完全に落胆し、二二日には和平を訴え始めた。

しかし状況はアフガニスタンの辺境が近接していることによって複雑になっていた。ムマンド溪谷の西側はヒンドウ・ラージ山脈の山々に囲まれており、その頂上に沿ってアミールとの境界となるデュラン・ラインがある。この区域の向こう側には強力な武力を持つアフガニスタンの最高司令官であるゴラム・ハイダーがいた。その総計は私が述べた戦闘の時点で九個大隊、六個戦隊、一四門の山砲に達していた。ザガイへの攻撃中に丘のより高い斜面にカーキ色の制服を着た多数の人影が観察され、特定のグループが部族民の動きを指揮しているように見えたと言張されている。とにかく、私は部族民がアフガン軍の正規軍に、より多くをアフガンの部族民に、武器弾薬の供給に留まらず実際の介入によって支援されていた事を疑わない。そうでなければマムンド溪谷の戦闘中にそこにいたのは

いったい誰なのであろうか。

私は辺境の蜂起におけるアミールの共謀の疑いについて発言するのに十分な証拠を持っていない。確かに長年にわたってアフガニスタンの政策は、一貫してパシヤン族の間で反乱を起こすのに使えるかもしれないエージェントを集めて維持することであった。しかしアミールがイギリスとの悶着から得られる利益は明らかではない。多分その地位の継続性やおそらく助成金増加の見地から、彼はインド政府にとっての彼との友情をより重要なものにするためだけにずっと全力を尽くしていたと思われる。彼は今年、その力を試し、誇示した可能性がある／そしてもし彼が味方としてあまり役に立たなかったならば、どんな危険な敵になるかを私たちに示したいと望んでいた。敏感で難しい問題である。証拠のほとんどは国家秘密文書の中にある。問い合わせることは有益ではない／ことによると結果は望ましいものではないかもしれない。愛国的な思慮分別は常に熱心に培われるべき徳である。

私が述べた事実がアミールの共犯の可能性を減少または増加させるとは思わない。アメリカの議事妨害者がキューバの反政府勢力に同情するように／ジェームソン襲撃隊がトランスバールのアウトランダーを支援したように、アフガニスタンの兵士と部族民も国境を越えて同郷人と同じ宗教の信者に同情し、支援した。おそらくアフガニスタン植民地局はいかなる調査においてもそれを立証するであろう。

彼らに同情心を主張させたその命を持ち帰らされることは、人々の恥辱ではなくむしろ名誉である。人類の進歩はまさにそのような人々に負ってきたのである。私がこの問題を暗示するのはアフガニスタンの部族民やその支配者に対する敵対的な感情を喚起するためではなくマラカンド野戦軍の第二旅団が直面した困難を説明するためである。なぜ名もない村に防御者が何千人もいて、なぜ貧困に苦しむ農民の武器が優れたマティーニ・ヘンリー・ライフルだったのかを。

マムンド族自体は今や心から和平を切望していた。彼らの谷は私たちの手にあった／彼らの村と作物は私たちの慈悲にかかっていた／しかし、こうしたことには苦しんでいない同盟者たちは熱心に闘争を続けようとしていた。彼らは一六日に死んだ兵士のライフルのほとんどを捕獲し、手放すつもりは毛頭なかった。一方、この問題において英国領インド帝国を無視することが許されないのは明らかであった。私たちはライフルの引き渡しを主張し、その高価な因子である帝国の威信は、いかなる代価を支払ってでもそれを手に入れるまで作戦を遂行することを要求した。ライフルにはほとんど値打ちがなかった。私たちが失った兵や将校たちには大きな値打ちがあった。それは不健全な経済学であった、しかし、帝国主義と経済学は、正直さと私的利益のようにはしばしば衝突することがある。したがっ

て、私たちは名声を維持するために、損の上塗りをするという方針をとることになった／商人に支払いができない男が決済の代わりに新しい注文をするように。これらの不十分な条件下で交渉が始まった。しかしそれが軍事情勢に干渉することはなく、軍隊は谷で毎日採餌を続け、部族民は毎晩キャンプに発砲した。

週の終わりには、負傷者の苦しみを労り、部隊の行動に満足していることを表明する女王陛下からのメッセージが旅団指令で発表された。それはすべての者に最も快い歓喜をもたらした。特に現地兵士たちは、その前で自分たちのプリンスがみな頭を下げ、サーカーですら召使にすぎない威厳ある君主が自分たちの行いと危険を知らなかったわけではないことを聞いて、誇りと歓喜を抱いた。皮肉屋や社会主義者はこういった類の者をあざ笑うかもしれない／しかし結束したり崩壊したりしがちな巨大な共同体である軍隊を注意深く考察する愛国者は、忠誠心の影響力がいかに帝国の連帯を促すかを観察するであろう。

そして読者は私に同伴して、一二マイル離れたナワガイの第三旅団のキャンプに行かなければならない。私たちは再びマムンド溪谷に戻り、その人々と自然の特徴についてさらに学ぶ機会を持つであろう。